

街道と文化の残る街

柏原 正則 ● トヨタ学園常務理事



名古屋市天白区

わが街・名古屋市天白区てんぱくは、名古屋市の東端に位置する。本学からは、北西に名古屋駅のツインタワーが、また南西に名古屋港に架かる吊り橋トリトンが、そして冬になると北東の方角には冠雪した御嶽山みづたけがよく見える。かつては東方に富士山も見えたという。多くの丘陵は開発により削られ、今では本学の地が市内では最も高い場所になり、標高八十三メートル余りで、測量のための二等三角点の印が残っている。その昔、通信手段が未発達のところ、この地は関東の米相場を尾張地方の産地の人々に旗で合図して知らせるといふ重要な中継地の一つであったと言われている。古くは天白川の流域が広く潟となりおおむね低地であったが、鈴鹿山脈の隆起時とともに隆起したものである。この潟は「あゆち潟」と言った。「愛知」の由来である。

このような所に本学は立地している。ここから眺めれば天白区はほぼ視野の中である。

一九六〇年、豊田中央研究所開設がこの地との関わりの始めである。トヨタのサイト選定方針の一つに、田畑など活用されている土地は避け、荒地などを選ぶとの考え方があった。

トヨタの社史によれば赤土に松の茂った荒地であった。同様に、この地もハイ松の茂る高台で、周辺に田畑は少なく、集落もまだ散見されるような荒地であったという。

約五十年前に豊田中央研究所が設置されたころは、人口も少なく名古屋の辺境地であり、近くの丘の斜面に牧場や草スキー場があった。その中に突然、ポツリと白い鉄筋の建物が出現したという風景であった。

本学より名古屋駅方面を遠望



その約二十年後、本学がこの地を豊田中央研究所から譲り受け開学した。すでに周辺地の半ばは住宅に埋め尽くされ、一部の道路の整備も緒に就こうとしていた。以来三十年、今では大都市名古屋の一部となり、本学敷地内の山林と近くの相生山緑地が区内の貴重な緑地となった。

一九五五年名古屋市に合併されて以来、農村から都市型の街へ変貌したが、かつての天白区の多くは農地や山林であった。また周辺の村落から名古屋市内への溪口集落として、あるいは名古屋市を起点とする街道に沿って発展してきた地域も擁していた。街道には人荷が集まり文化が定着する。溪口集落は街道の通過点であり、分岐点にもなっている。天白の街道の主幹は、やはり名古屋市の中心から信州へ通じる飯田街道である。この街道は、天白区に入って八事を経て植田に至り、熱田神宮への「みやみち」を分岐する。さらに東進すると、名古屋市の東端の平針で二本の街道を分岐する。豊田市（旧挙母市）へ向かう挙母街道と、徳川家康が開いたと言われる平針街道（別名岡崎街道または姫街道）である。東海道の前身である鎌倉街道も、区内を東西に横断していたと言われる。これらの街道沿いには、城、砦、陣屋など歴史的建造物があったという。現存するものは少なくなつたが、今に残るいくつかを、飯田街道に沿って紹介したい。

名古屋市の中心の味噌・塩問屋で信州向け荷造りをした馬は、東に向かい、天白区八事の峠にかかる。この峠から南に

かけての丘陵地は、音聞山の名で知られた天下の名勝であったという。西南にあゆち潟、熱田の海を眺め、その海鳴りが聞こえたらしい。陸軍大演習の際、大正天皇が野だてされたという記念碑や、多くの古歌が残されている。本居宣長の「さのふまで音にも聞かぬ音ききの 山の桜をみらくしよしも」もその一つである。峠の周辺は今や繁華街の中心であり、音聞山もはやその風情をとどめない。峠で水を補給した馬は東に下り、植田に至る。古くは前方後円墳の跡に植田八幡社が建立された。門前には今も馬頭観音が残っている。

街道は東進して平針に出る。ここには本陣や旅籠が集まり、街道の分岐点としてにぎわった。街の外れの鎮守の森の中に針名神社と秋葉神社が隣り合つてまつられている。ともに平安時代の創建である。このうち秋葉神社には、桶狭間の戦いの際、織田信長が戦勝祈願したとの伝承があり、勝利後に寄進した尊像が今もまつられているという。

このように古来、街道は人の流れを通じて文化を生み出してきたが、二〇一一年には、本学の近くに地下鉄が延伸し、相生山駅が誕生。また同時期に、北の東名高速道路と南の伊勢湾岸自動車道の二つを南北につなぐ名古屋第二環状自動車道（有料道路）が開通し、近くにインターチェンジができた。これにより本学へのアクセスは飛躍的に向上した。このような新しい時代の新しい「街道」はこれから私たちにどのような文化と未来を創造してくれるのか、大いに楽しみである。

清水 敦 ●武蔵大学学長

七 年 制 高 等 学 校 の 開 設 と 臨 時 教 育 会 議

——旧制武蔵高等学校の歴史を振り返って

一 はじめに

私立大学は建学の理念に基づき特色ある教育を行っているが、こうした各大学の個性は開学以来の歴史の中で形造られてきたものである。したがって各大学で学ぶ学生は、自校の歴史を学び、自校の教育の特色を深く理解すべきである。それを通じて、それぞれの大学で学ぶことの意義を確かめることができるだろう。

このような認識に基づいて武蔵大学では、学園設立以来の歴史を学ぶ「学園史百年プロジェクト」という名称の授業を行っている。本学では、平成二十三年（二〇一二年）年度カリキュラムから、いわゆる一般教養科目を全学で統一し、この科目群を「総合科目」と呼ぶこととした。「学園史百年プロジェクト」はこの「総合科目」の中の授業であり、学部を問わず学生が履修する。また「総合科目」には、通常

の講義科目だけでなく、少人数のクラスで行うアクティブラーニング型の実践科目も置かれており、「学園史百年プロジェクト」はこうした実践科目である。

武蔵大学は昭和二十四（一九四九）年に新制大学としてスタートしたが、その前身は大正十一（一九二二）年に設立された旧制武蔵高等学校であり、平成三十四（二〇二二）年には学園設立百周年を迎えることとなる。そこで、このときまでに学園百年の歴史を学生たちが調べてまとめあげることを目指すものが「学園史百年プロジェクト」という授業である。具体的には、学園の歴史を十年ごとに区切り、学生たちが調べた成果をまとめて『Ten Decades』という冊子を発行する。平成二十三年度に作成したその創刊号では、大正十（一九二二）年から昭和五（一九三〇）年までの時期を取り上げ、初代校長一木喜徳郎の人物研究などを掲載した。

この創刊号で取り上げた学園設立当初の十年は、本学の現在の教育について考えるうえで特に興味深

い。というのは、私立大学の特徴や伝統は、学校設立の目的や創設期のあり方によるところが大きいからである。武蔵大学においても教育の基本指針は、旧制武蔵高等学校設立時に定められた建学の理念（「建学の三理想」）を継承して現在に至っている。そこで、旧制武蔵高等学校の設立時の様子について、私の考えるところを以下で記すことにしたい。

二 旧制武蔵高等学校の開学と臨時教育会議

旧制武蔵高等学校の設置法人である財団法人根津育英会は、鉄道やビールなどの諸事業を幅広く行っていた実業家である根津嘉一郎の寄付金を基本財産として設立された。教育事業によって社会に貢献しようとする根津嘉一郎の志が、旧制武蔵高等学校という形をとって実現したと言える。その一方で、新たに設立されたこの学校の形や教育のあり方は、以下で述べるように、大正六（一九一七）年に設立された臨時教育会議と深く関わっていたのである。

学校制度改革のための検討は明治二十年代末から始まっていたが、大幅な改革は実現しなかった。しかし、大正五（一九一六）年に岡田良平が文部大臣に就任すると、学制改革は大きく進展することとなった。この改革の推進力は、大正六年に設置された臨時教育会議であった。

臨時教育会議は、「第一次世界大戦後の新しい情勢を背景として、多年にわたり論議されてきた学制改革のすべての問

題を改めて検討し、なが年の懸案を一挙に解決することを目ざしたものであった^{*)}。文部大臣が臨時教育会議に諮問した事項は、小学教育、男子の高等普通教育、大学教育及び専門教育、師範教育、視学制度、女子教育、実業教育、通俗教育学位制度の九項目に及び、当時の学校制度の全面的な改革方針が検討され、答申にまとめられた。そして、臨時教育会議の結論に基づき、実際に学制の改革が行われた。ここでその全体を述べることはできないが、例えば大正七（一九一八）年に制定された大学令は、官立のほかに私立や公立の大学を認めるなど大学の制度を大きく変更するものであった。また、高等学校についても著しい改革が行われた。すなわち、同年に公布された高等学校令は、高等学校を、高等普通教育を行う機関と規定し、大学予科の性格は制度上改められた。さらに高等学校の修業年限を、高等科三年と尋常科四年からなる七年とし、特別な場合として高等科三年のみを置く高等学校を認めることとした。

根津嘉一郎が教育事業を行う計画を進めたのは、臨時教育会議の答申に基づく学制改革が実施されていた時期であった。根津は大正八（一九一九）年に、臨時教育会議の総裁であった平田東助に協力を依頼し、平田の推挙によって、岡田良平のほかに、岡田の実弟で法科大学教授や文部大臣を務めた一木喜徳郎、東京帝国大学総長などの要職を歴任した山川健次郎、東北帝国大学総長や学習院長を務めた北条時敬という当時の教育界の重要人物が、平田と共に根津育英会の役員とし

て加わることとなったが、これらの人々はいずれも臨時教育会議のメンバーであった。[＊]その結果、法人設立時の役員十一名のうち五名を臨時教育会議の委員が占めることとなったのである。また、初代校長には、このうちから一木喜徳郎が就任することとなった。根津育英会・旧制武蔵高等学校が臨時教育会議との深いつながりのもとに発足したことは、このことから明らかである。

旧制武蔵高等学校の設立と臨時教育会議との関連は、こうした人事面に限られるものではない。臨時教育会議答申の高等学校制度改革の柱は、前記したように七年制高等学校であった。しかし、高等学校令が成立したにもかかわらず、当初、七年制高等学校の設立は容易には進まなかった。こうしたときに根津から教育事業について相談を受けた一木は、臨時教育会議においてその必要性を強く主張した七年制高等学校の設立を勧めたのであった。[＊]こうして旧制武蔵高等学校は、わが国最初の私立の七年制高等学校として開設されることになった。

私立学校の中には、ある教育者個人が自らの理念に基づく教育を実現するために設立したものが少なくないが、旧制武蔵高等学校の場合はこれとは異なっている。教育事業によって社会に貢献しようという根津嘉一郎の意思に基づき、臨時教育会議の答申に基づく教育改革を実行するものとして、この会議に参加した人々の関与のもとに、旧制武蔵高等学校が設立されたと言える。一木は「東京朝日新聞」の取材に応え

て、「高等学校の七年制度は臨時教育会で私が極力主張したものであるから校長を引き受けて此任に当たることは云はば私の理想を実現する訳である」と述べているが、この発言は旧制武蔵高等学校の開学のこうした事情を端的に示すものと言えよう。

三 武蔵学園の建学の理念

旧制武蔵高等学校の開学の際、その教育の基本理念が「建学の三理想」という形で定められた。この基本理念は、現在においても本学で継承されているが、これも、当時の日本の教育に関する一木喜徳郎をはじめとする人々の課題理解や高等教育に関する臨時教育会議の認識と関連がある。

この「建学の三理想」は、開学後数年を経て「一、東西文化融合のわが民族理想を遂行しうべき人物、二、世界に雄飛するにたえる人物、三、自ら調べ自ら考える力ある人物」という形に整えられたが、その原型は、開学時の第一回教師会での一木校長の訓示にある「正義を重んじ、真理を愛し、自ら考究しうる能力を有し、将来世界に活動しうる体力を有す」である。[＊]

このうち「自ら考究しうる能力」あるいは「自ら調べ自ら考える力ある人物」については、臨時教育会議の答申における「高等普通教育ニ於テハ一層各学科ノ連絡統一ヲ図リ理會力ト独創力トノ啓発ニ努メ且ツ上級學級入學ノ準備ニ汲々

ル弊風ヲ除去シ高等普通教育ノ本旨ヲ完カラシムルノ必要アリト認ム」という部分との結び付きを考えることができる。一木校長は、第一回入学式の式辞において、中学校に入学した者は四年または五年後の高等学校進学のために「激烈ナル競争試験」を受けなければならないが、七年制高等学校である武蔵高等学校に入学した者は大学進学までその必要がないのであって、これは教育上非常に優れた組織であり、その利点を十分に活用して努力しなければならぬと述べている。*

高等学校入学のための受験競争の弊害を解決するものとして、七年制高等学校という新たな制度があるのであり、この制度によって「理合力ト独創力」を有する人材の育成を行うべきであると考えられていたと言える。

また、「将来世界に活動しうる体力」あるいは「世界に雄飛するにたえる人物」については、第一次世界大戦を経て国際的に活躍できる人材が必要となる中、その確保が困難であったという当時の日本の事情が関係している。この点は一木喜徳郎が強く感じていたところであって、「戦後日本ノ地位ハ大二高マリ、外交ハ勿論他ノ政府ノ仕事モ実業界其ノ他民間ノ事業モ益々世界的ト為ツテ」きたが、「世界ノ舞台ニ立ツテ活動スベキ人物ハ見渡ス所甚ダ欠乏シテ居ル」と述べ、語学力を有して国際的に活躍できる人材を育成する必要性を強調している。*

以上のように武蔵大学の前身である旧制武蔵高等学校の設立は、明治維新から半世紀が経過し、第一次世界大戦をも経

験して日本社会が大きな転換点を迎えていたときに、臨時教育会議を中心に教育のあり方を改革しようとする動きと深く関係していた。それから九十年が過ぎた現在、日本の教育のあり方があらためて問われているが、興味深いことに、今求められている改革の方向は、「総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力」やグローバル人材の育成など、当時目指されていたものと重なる部分が多いと言える。

*1 文部科学省「学制百年史」

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/other/detail/1317552.htm

*2 根津嘉一郎談「育英事業ノ思ヒ立及其ノ経過」（武蔵学園記念室編『武蔵学園史年報』創刊号、平成七年

*3 一木喜徳郎談「七年制高等学校ノ必要ナル趣旨」『武蔵学園史年報』創刊号

*4 前掲『武蔵学園史年報』創刊号、40ページ

*5 大坪秀二「三理想成立についての資料を読む」『武蔵学園史年報』第三号所収、平成九年

*6 文部科学省「学制百年史・資料編」

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/other/detail/1317930.htm

*7 一木喜徳郎「入学式式辞」『武蔵学園史年報』創刊号

*8 前掲「七年制高等学校ノ必要ナル趣旨」

*9 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」、平成二十四年八月

元気ではつらつとした 大学の人気者

森田 良平 ●同志社女子大学総務部広報課

愛らしい表情が印象的な同志社女子大学のキャラクター、VIVI（ヴィヴィ）。二〇〇三年に誕生し、今年で満十歳を迎える。元気ではつらつとした姿のとおり、名前は「躍動的、きびきびした」という意味の英単語vividから名づけられた。



VIVI

本学は、一八七六年の創立以来、伝統的に英文学・家政学・音楽を柱としたリベラル・アーツ・カレッジであったが、二〇〇〇年以降、現代社会学部や薬学部など、社会からの要請と現代女性のニーズに沿った学部学科

を次々に開設し、大胆な改革へと舵を切った。そのような状況下にあって生まれたVIVIの元気で明るい姿は、本学の新しいイメージを打ち出していくのに十分な貢献を果たしてきたと言える。

●VIVIのビジュアル

単に見た目のかわいらしさだけでなく、それぞれのパーツには、本学の歴史やキリスト教主義、国際主義、リベラル・アーツの三つの教育理念を色濃く反映させている。

・三角形が合わさったりボン……智・徳・体の三位一体と調和を目指す同志社の徽章を表している。

・ステッキ先のぶどう……ぶどうのつる (vine) は聖書では人と人とのつながりを表し、同志社カレッジソングの一節にも「同志社の学徒は、ぶどうの枝のごとく、つらなりゆくであろう (英文対訳)」と、その名称が登場する。

・レンガ色のワンピース……レンガ造りの校舎と同系の色で学び舎の知性を表現。

・幾重にもなったボーダー柄……百三十七年の本学の歴史を表現。

・黒と青の二色の瞳……教育理念の一つ、国際主義に基づき、日本はもちろん、世界を見渡せるグローバルな視野を表現。

・靴……甲についたボンボンで世の中の動きを素早く察知し、しなやかに動くことができる「好奇心の靴」。

●V I V I誕生の経緯

(1) 二〇〇二年六月 募集開始

大学の新しい姿を表現し、親しまれるキャラクターをとう思いから、在学生・教職員を対象に募集を開始した。

(2) 二〇〇二年十月末 応募締切

応募総数は四十七作品。締切後、ただちに検討を開始し、猫や女の子、妖精などの中から、猫をモチーフに制作を開始することとなった。動物には愛着が生まれやすく、特に猫は自主自立で活発なイメージがあり、訴求していきたい本学が育むべき女性像に合うなどの理由からであった。

(3) 二〇〇三年一〜三月 デザインの決定

五つのデザイン案を検討し、現在のデザインに決定した。

(4) 二〇〇三年四月 キャラクター名募集

一般の方の応募も受け付け、新聞各紙にも募集キャンペーンが掲載された。応募総数は百三十九件であった。

(5) 二〇〇三年五月 名称決定 V I V I誕生

学内の委員会を経て、現代社会学部四年在学生(当時)の案、「V I V I」に名称が決定した。ほかにはオードリー・ヘッパーンを連想させる「ドージュリー」、リベラル・アーツにちなんだ「リベラ」などの名称が最終候補に残った。その後、商標登録や色指定などとともに「よろこぶ」「すわる」「ねころぶ」など、十四種類のポーズが制定された。

●活躍するV I V I

V I V I誕生当時、このようなキャラクターを展開する大学はまだ珍しく、学内においても「本学に猫のキャラクター

はそぐわないのではないかと、その存在を疑問視する声も少なからずあった。しかし誕生後十年を経た今、V I V Iの存在は定着し、さまざまな場面で活躍している。例えば、大学案内などの紙媒体や本学HPでその姿を見ることができるよう、V I V Iをあしらったシャープペンシル、クリアファイル、ふせん、ぬいぐるみなどのオリジナルグッズも続々登場している。本学の入学試験会場では、オープンキャンパスに参加して手にしたV I V Iシャーペンを手にも、試験に臨む受験生を毎年見ることができるようだ。また、学園祭や大学行事、学科のイベントに関わる学生スタッフが着用するパーカーやTシャツにもV I V Iの絵柄は好んで使用されている。本学は伝統的に教員と学生の距離が近く、それは在学生の満足度の高さとなって数値にも表れている。V I V Iは、彼女らが本学で学ぶ幸福感、誇りを実感できる、目に見えるツールとしてその役割を十二分に果たしている。また、「仕事に疲れたときはV I V Iシャーペンを見ます。そうすると、学生時代を思い出して元気になるんです」。ホームカミングデーに参加した三十代の卒業生がそうコメントするように、卒業生にとってもV I V Iは貴重な癒しの存在となっている。ちなみに、同法人である同志社大学でも、創立者新島襄の愛犬にちなんだ「Beda(べんけい)」が二〇〇八年に誕生した。さらに二〇一一年には、新島襄の妻で、大河ドラマ「八重の桜」の主人公である新島八重をモチーフにした同志社の新キャラクター「八重さん」が誕生。これを機に、三者のコラボレーションによる展開も期待されるところである。

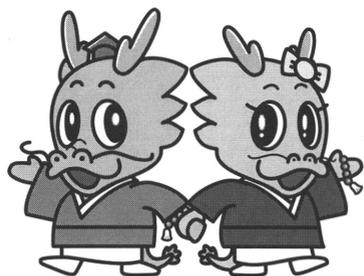
マスコットキャラクターによる成果

龍谷大学学長室（広報）

●マスコットキャラクター導入の経緯

龍谷大学のマスコットキャラクター「ロンくん」「ロンちゃん」は、本学の創立三百七十周年（二〇〇九年度）の記念

事業の一環として制作された。



ロンくん、ロンちゃん

「ロンくん」のデザインは、二〇〇九年四月三日から八月二十八日まで、本学ウェブサイトや広報誌、FM京都のラジオ番組などで公募し、

二百二件の応募作品の中から、龍谷大学の頭文字である「龍」をモチーフに学内選考を行い、現デザインを採用した。

「ロンくん」のネーミングは、二〇一〇年二月二十二日から三月十九日まで、在学生と教職員を対象に募集を行い、五百二十五件の応募作品の中から、呼びやすさやキャラクターデザインに合う点などを考慮して決定した。

また、在学生などから男女ペアでのキャラクター展開に対する要望が多数寄せられたため、女の子のキャラクターである「ロンちゃん」を新たに制作。ペアでの愛称を「ロンロン」とし、現在、本学のマスコットキャラクターとして各種イベントなどで幅広く活躍している。

●マスコットキャラクターの活動

マスコットキャラクターの活動としては、入学式・卒業式、オープンキャンパス、課外活動の試合の応援など、年間を通じて各種イベントに出演をしている。近年の「ゆるキャラ」ブームも後押しし、マスコットキャラクターが出演することで各イベントの盛り上げに大きく貢献するとともに、本学の学生のみならず、保護者、卒業生、地元住民にもその認知度が向上しており、年々マスコットキャラクターの出演回数も増えている。



また、一昨年度から実施している地方での本学吹奏楽部の吹奏楽イベントにもマスコットキャラクターが出演し、会場を盛り上げることで、本学と初めて接点をもつ幅広い年齢層の方々に本学を覚えてもらう一つのツールにもなっている。

併せて、日本各地で開催されている「ゆるキャラ」を対象としたイベントなどにも積極的に参加することで、龍谷大学マスコットキャラクター「ロンくん」「ロンちゃん」として、

全国各地で本学を知ってもらう機会につながっている。

●マスコットキャラクターの導入による成果

先に述べたように、各種イベントにマスコットキャラクターが出演・参加することで、イベントの盛り上げや本学の認知度向上に大きく貢献をしているが、それ以上に、マスコットキャラクターの導入

が、学生を含む学内構成員のインナーコミュニケーションのきっかけにつながったことが大きな成果だと言える。例えば、学生と教職員が共同で開催するイベントにマスコットキャラクターが参加するだけで、マスコットキャラクターの周りには多くの人が集まり、自然と場が和む。その結果、コミュニケーションが容易になり、学生、教員、職員の中で新たな会話が生まれ、連帯感や共通認識が芽生えるきっかけとなった。また、学生と教職員のコミュニケーションが増えることにより、学生の声が教職員に届く機会の創出にもつながったと言える。

大学構成員がベクトルを合わせ協働して進んでいくことが大学の活性化のために必要とされる中で、その重要なファクターの一つであるインナーコミュニケーションの創出のきっかけに、マスコットキャラクターが貢献していることは大きな成果である。

●今後の展望

今後は、龍谷大学のマスコットキャラクター「ロンくん」「ロンちゃん」として、地域を問わず幅広い年代から愛されるマスコットキャラクターになるよう、新たな活躍の場を検討するとともに、学内構成員、ステークホルダーとのコミュニケーションツールへと発展させるため、より創意工夫を行っていく。

マスコットに一線画す スピリッツキャラ

森 玲子 ●東京経済大学長室広報課長

建学の理念のビジュアル化が、時空を共有するメンバー各人のプライドを喚起すると同時に、社会的評価を形成する外部ファンの求心力となる。抽象的なキャッチフレーズはキャラクターとしてビジュアル化されたことで、キャンペーンは遊するスピリッツとなって生命をもった。九つの人形それぞれには創立者の起業会社にちなみ、愛称と性格づけを行い、「勢ぞろい」の総称をTKUチャレンジャーズとした。

二〇〇八年七月二十日午前八時に、公式ウェブサイトのトップページの大バナーにてデビューした。オープンキャンパス告知のためのサテライトサイトと位置づけ、アニメーションで動きを出すことでアピールを増した。予告なきスタートという形は、会議体での意思決定を主体とする組織にあつては、送り手として冒険ではあったが、水面下で役職者の賛同をとりつけるなどして臨んだ「演出」であり、マスコミへの売り込みも済ませた。インビジュアルでパブリックなミッシヨ

ンを「みんなで共有する」最初のステップとして、「風を起す」にはほかに方法がないと判断されたのである。

今から振り返れば、入試に関する募集広告が主でキャッチコピーやブランディングとは遠い、説明的な広報活動に所与の予算を費やしてきた歴史の中で、針の穴ほどの小さなものであっても確かに風穴が開いたショックキングな出来事として受け手に認識されて、さまざまな反響が寄せられ、想定どおり、ハリケーン級の風を呼び込んだ誕生となった。この日を境に「東京経済大学ってなに？」と好奇心をそそる「広報」への関心が高まった。とりわけ教員と在学生には「教育活動やキャンペーンの成果が広報活動につながるのだ」という、アサーティブで生き生きとした所属意識、換言すれば東京経済大学の一員としてのプライドが芽生えたのである。以降これまで、ターゲットや媒体チャネルに合わせ、コピーを語る「役者」として、キャラクターを登場させている。「ファン」となるきっかけは「認知」されることであり、一人当たり一日平均で三百以上の広告を目にすると言われる中で、「見る」から「認知する」にレベルアップするには仕掛けがある。キー（KFS）となるのは、キャラクターにメッセージ性を吹き込む舞台とツールが連動する物語として、あらゆるステークホルダーを宣撫し、訴求する工夫である。スピリ

